

## 谷崎潤一郎全集逸文紹介 2

細江光

以下に紹介・翻刻するのは、私が収集しえた谷崎潤一郎の全集逸文である。紙数の都合で『甲南国文』（平成三年三月刊）に1.『夢（其一）』と2.『ポオドレエルの詩』を掲載したので、併せて御覧頂きたい。なお翻刻の際、本文には一切手を加えなかった。

### 3. 『反古箱』

これまで初出が不明であったが、「社会及国家」の大正六年二月号（四二号）である事が判明した。従って、文中の《大村君》は、一匡社社員で医師の大村正夫である。全集本文は、初出冒頭の一節を省いている

ので、ここには除かれた部分だけを翻刻する事にした。

### 反古箱

谷崎潤一郎

○反古箱と云ふのは其の名の如くホゴバコである。何でも彼でも思ひ出づるまゝを紙へ書き捨て、それをまるめて口で噛んで、ぼつと吐き出したやうなものがある。しかし、皺くちやにまるめた紙の中にも、時々いゝ文句が書いてあつたり、適切な考へが述べてあつたりする。満更捨てたものではない。

## 4. 『夏日小品』

これまで初出が不明であったが、「社会及国家」の大正六年七月号（四五号）である事が判明した。全集本文と比較すると、「更紗」の《予はいろ／＼の柄を展げて眺めたが、孰れも此れも怪しく美しく、》と《見るからに垂涎三尺の品ばかりであった。》の間に、《さながらパウエル、ゴオガンの繪に接するやうなエキゾティックの匂が高く、》という一句が入る事、末尾に「松本藤四郎君」と題する一文がある事、等が主な異同である。ここには「松本藤四郎君」と題した一文を翻刻する事にした。

文中にある六七年前の同室会とは、津島寿一『谷崎潤一郎君のこと』に言う明治四五年五月頃に行われた大学卒業前祝いの会を指すものと思われる。君島一郎『朶寮一番室』によると、大正六年春に谷崎は、友人たちと共に、松本藤四郎の墓参りに愛知県新城まで行ったと言う。ただし、本文の記述から見て、大正六

年春は誤りで、実際はもう少し後の事だったと思われる。なお、文中の松本藤四郎・伊沢（道雄）は、共に一匡社員である。

## 松本藤四郎君

故人の噂をしたついでに、亡友松本藤四郎君の事を書く。ついでと云つては申譯がないが、同君を追憶する文章は、多分それ／＼一匡社同人に依つて寄稿され、比較的交際の薄かつた予の如きが口を出すにも反ぶまいと信ずるからである。

交際が薄いと云つても、予は同君を可成りよく知つて居る。あの四角な顔の、眼の下の邊をピリ／＼と癢癢させて、低い聲で冗談を云つた佻が、今でもあり／＼と頭に残つて居る。

もう六七年前であるが、嘗て代地の柳光亭で同室會を催した歸りに、予は同君とたつた二人で、柳橋の河岸通りの銀月と云ふ蠣めし屋へ上つた事がある。二人は其處で、チャブ臺に相對しながら夜更くる迄胸襟を

開いて語つた。君はよく予の性格や仕事を理解し同情して居てくれた。予もその時、君の人物や性格が始めてほんたうに分つたやうな心地がした。何處やらに飄逸なところがあつて、而も重厚な謹嚴な、非常に暖かみのある人間だなど、予はその折にしみるゝ感じた。

松木君は決して豪傑のやうにも才子のやうにも見えなかつたが、何處と云つて缺點のない、着實な、さうしてなか／＼諸諺に富む人であつた。ちよいと見ると平凡なやうで、而も耿々の志を深く藏して居るやうに感ぜられた。彼は居常冷靜であつたが、その實熱情家であつたに違ひない。

彼の病氣は腸結核であつたと云ふ。學校時代に柔道をやつて、あれ程身體を練磨した人が、結核に罹つて夭折するとは誰しも思ひ設けぬ事であつたらう。さう云へば松本君の容貌は、今になつて考へると、何となく影のうすい所があつた。

腸結核と云へば、今から七年前に十六歳で夭折した予の妹も同じ病氣であつた。否そればかりではない。去る五月十四日の朝、伊香保の温泉で津島氏から松本

君の訃報を受け取つた予は、それから一時間も経ないうちに再び予の妻から、母危篤の電報を受け取つたのである。さうして惶てゝ東京へ歸つて來ると、母はもう亡き人の數に這入つて居た。松本君の死は、予が骨肉の母の死と結びついて、予に取つては永久に忘れ難いものとなつた。

先日、學士會館で伊澤氏に會つた時、「故人の郷里へ行つて父兄に悔みを述べたいと思ふが、われ／＼の達者な姿を見ると故人の生前を想ひ出して斷腸の情に堪へないから、暫く來訪を見合はせてくれと、家族の人々から云つてよこした」と云ふ話であつた。成る程、さうなければならぬ事だと予は思つた。予と雖、此の間友人の結婚披露に精養軒へ招かれて、七十に近い友人の老母が欣然として席に連つたのを眺めた折に、亡母の事を想ひ出して思はず知らず涙がはらはらと落ちて來た。七十になつて、杖に縋りつゝ我が兒の婚禮を祝する母もあるものを予が母は僅かに五十四歳で斃れたのである。況んや齡三十にして早世したる松本君をや。遺族の悲嘆は察するに餘りがある。

## 5. 『アツシヤア家の覆滅』

「社会及国家」大正七年七月、八月号（五七、五八号）

Edgar Allan Poe “The Fall of the House of Usher” の翻訳。ただし、エピソードを欠き、全体の五分の程度で中絶している。谷崎は、この年十月九日から二カ月にわたって中国を旅し、更に帰国後間もなく父が病床につく等の事があった為に、中絶のやむなきに至ったのであろう。なお、谷崎がこの翻訳を思いついた背景には、嘗てポオドレエルがポオを翻訳したという事実があろう。

## アツシヤア家の覆滅

谷崎潤一郎

その年の秋の、重々しい雲が空に低く垂れ懸つた、ものうい、暗い、ひそりとした日のことである。私は終日、たつた獨り馬に跨つて怪しく荒れ果てた田舎路を通つて行つた。さうして日脚が傾いた時分に、やう

やう陰鬱なアツシヤアの邸が見える所まで辿り着いた。私には其れがどう云ふ譯だか分らない——が、その建物を一と目見るや否や、或る堪へ難い悲しい氣持ちが、私の胸に沁み徹つて行つた。私は特に堪へ難いと云ふ。なぜかと云ふのに、人間の心と云ふものはたとへ世の中の最も物凄、どんなに荒廢した、どんなに恐ろしい光景に接しても、詩的な感情に助けられて半は慰められるのが常であるのに、その時の氣持ちは少しもそんな餘裕を許さなかつたからである。私は自分の眼の前にある景色を眺めた。——そこに立つて居る一箇の邸宅、構への内にある單純な田園の風物、——青褪めた土塀の壁、——がらんとした眼玉のやうな窓、——それから二三本の白い枯木の幹、——それ等の物を眺めた折の切ない重苦しい心持ちは到底此の世に喩ふべきものもない、強ひて云ふならば其れは阿片の毒に或溺して、——日に日に傷ましい墮落を重ねつゝ、——醜惡な弱點を曝露する人間の、寢覺めの惡さにも比較すべきであらう。そこにはたゞ心の臟を氷の如く寒からしめ、深く深く、病人のやうに滅入ら

せるものがあるばかり、——いかなる空想の力を藉りても何等の緊張した莊嚴さをも感ずる事の出来ないやうな、満目荒涼たる、癒やし難い觀念があるばかり。一體どういふ譯であらう、——私は立ち止まつて考へて見た、——一體どういふ譯で、アツシヤア家の景色がこんなにまで私を慄然たらしめるのであらう？それは凡べて解し難い謎であつて、考へれば考へるほど私の頭の中には影のやうな幻がもやもやと湧き上つて來たが、私はそれさへも捕捉する事が出来なかつた。私は結局、不満足ながらもかういふ結論に到着するより仕方がなかつた。

つまり、極めて單純な自然物を或る一定の方法で配列すれば、そこにわれわれを斯までも感動させるやうな力が生ずるのである。其れは疑ひもない事實であるが、しかし此の力を分析する事は到底吾人の思索の外にあるのだ。その畫面の中にあるディテイル、その風景の中の箇々物の位置をちよいと取り換へれば、此の陰鬱な印象を制限し、或ひは滅却するに充分であらうと私は思つた。さう考へると共に、私は馬を進めて、

邸の傍にどんより光つて居る暗澹たる古沼の峻しい涯の縁まで行つた、さうして、水の面へ倒まに形を映して居る灰色の葦蘆や、幽靈じみた枯木の幹や、がらんとした眼玉のやうな窓の影を——嘗て覺えた事のない激しい戰慄に襲はれながら——瞰おろしたのであつた。

而も私は、今や此の憂鬱な邸宅に數週間を送らうとしてやつて來たのである。此の家の主人の、ロデリック、アツシヤアと云ふ人は、以前少年時代には私と氣の合つた仲間同士であつたのだが、その後二人は長い年月の間別れ別れになつて居た。ところが先だつて一本の手紙が、——彼の書いた一本の手紙が、——遠い田舎の地方から私の許へ届いたのである。その恐ろしく執心しんじんな懇願的な調子を見ると、私はどうしても訪ねて來ずには居られなかつた。彼の神經が焦ら立つて居る事は、書信の面に一目瞭然と露れて居た。手紙の主は自分の肉體が激烈な病氣に罹つて居ること、——精神上の懊惱の爲めに苦しんで居ること、——などを訴へて、彼の最も親密な、さうして而も唯一の友人であ

る私が側に居て慰めてくれたなら、少しは容態も軽く  
なるであらうから、是非顔を見せてくれるやうにと頼  
んで来たのであつた。これ等の事がこまごまと認めら  
れてある外に、猶それ以上の——彼の切なる表情が生  
々しく文字の底に迸發して居る其の手紙の書き方は、  
私に何等の躊躇をも與へなかつた。そこで私は、いま  
だに此の奇怪なる召喚の理由が分らないにも拘らず、兎  
にも角にも直ちに其の乞を容れたのである。

二人は子供の時分に、随分仲の好い間柄ではあつた  
ものゝ、實を云ふと私は此の友達の事をあまりよくは  
知らないのである。彼の沈黙がちな性質はその當時極  
端に走つて常に彼の特徴をなして居た。尤も私は、非  
常に古くから續いて居る彼の一家の人々が、いつとは  
知れぬ時代から、或る獨特な、天稟の感受性を備へて  
居て、それが累代の長い間に多くの高尚な藝術上の作  
品となつて發露したり、又近年に反んでは、幾度か情  
深い奥床しい慈善事業となつて現れたりした事や、此  
れもその發露の一例である熱烈な渴仰が、誰にでも氣  
が付き易い美點を持つた普通の音楽趣味よりも、恐ら

くはもつと眼立たない方面へ餘計に注がれたらしい事  
をも知つて居た。私はまた頗る注目に値する斯う云ふ  
事實をも聞き込んで居た。と云ふのは、昔も今も變ら  
ぬ尊敬を受けて居るアツシヤア一族の血統と云ふもの  
は、嘗ていかなる時代に於いても、分家を出した事が  
ないのである。語を換へて云へば、その全體の家系が  
一本の直線を成して伸びて居るばかりで、極めて些細  
な、一時的の變化はありながら、依然として其のまゝ  
今日に反んで居る。此の缺陷がある爲めに、と、私は  
此の一家族の異常な特色と共に其の邸の光景の特色を  
精細に想ひ浮べながら、同時に又此の二つの物が、數  
世紀の長い間に、互ひに反ほし合つたに違ひない影響  
の程度を考慮しながら、思索したのであつた。——恐  
らく此の、傍系を出さなかつたと云ふ缺陷がある爲め  
に、且その結果として、代々同じやうな調子で世襲財  
産と家名とが親から子へと傳へられて来た爲めに、二  
つの物は遂に全然同一になつて、その領地の元來の名  
義は「アツシヤア家」と云ふ漠然とした曖昧な稱呼の  
中に消えてなくなつてしまつたのであらう。——現に

土地の百姓が用ゐて居る此の稱呼のうちには、その家族と家族の住んで居る邸宅と、兩様の意味が含まれて居るのである。

先にも云つた通り、私のやゝ子供じみた實驗が齎した唯一の結果、——あの古沼の水面を蹴おろした後の感じは、最初の不思議な印象をますます強くしたに過ぎなかつた。私が自分の迷信の、——さうだ、迷信と呼んでも差支へはあるまい。——急激に増進しつゝあるのを意識すればするほど、それは結局増進その物の速度を倍加させるに過ぎない事は明かであつた。さう云ふ風になるのが、凡べて恐怖を根底にして居るあらゆる感情に共通な、奇妙な原則である事を、私は長い經驗に依つて知つて居る。さうして大方それが原因であつたのかも知れないが、私が水たまりの影像から目を離して實際の家を見た時、忽ち其處に或る怪しい幻想が私の心に浮かび上つたのである。——(未完)

此れはエドカア、アラン、ボオの物語の翻譯なり。次號より漸を追うて全部譯出すべし。

## アツシヤア家の覆滅

谷崎潤一郎

——續ぎ——

その幻想はいかにも荒唐無稽なもので、その折の私の胸が、どれほど生き生きとした力強い感情で充たされて居たかを示す爲めに、私は茲に一言せざるを得ないのである。私は實際、その邸宅や領地の全體が、その一區域に特有な一種の空氣、外界のものとは違つた、朽ち腐つた樹木や、灰色の土塀や、黙々たる古沼からじめじめと這ひ上る空氣、——だるい、ものうい、微かに其れと分るやうな、鉛色をした、毒瓦斯のやうな神秘的な水蒸氣の中に、包まれて居るかの如く想像したのであつた。

私は此れ等の夢でなければならぬ物を振り拂つて、もつと詳細に其の建物の實際の姿を點檢した。それは大體が極めて昔風な特色を備へた、見るからに古色蒼然たる建物であつて、細かい菌のやうな植物が家全體に蔽ひ被さり、精巧に纏れ絡んだ蜘蛛の巢細工の

やうに軒端から垂れ下つて居る。けれども別段、此れが爲めに夥しく破損した箇所があると云ふ譯ではない。その石造のどの部分にも壞れ落ちて居るところはない。さうして其處には、部分部分の均整が未だに完全に維持されて居ながら、それを組み立てゝゐる一つの石ころがぼろぼろに崩れかかつて居ると云ふ、合點の行かない不一致が存在して居るやうに見える。

それは私に、外側は立派な癖に目に付かない内側の方の圓天井が、外氣の交通を遮斷されて長年の間に腐つてしまつた、古い木造普請の全體を想はせるやうな趣があつた。が、此の全體の上にひろがつて居る衰頹の徴候を除いてしまへば、その建物には別に何等の不安定らしい所もない。尤も、非常に注意して觀察する人さへあれば、その人は多分、殆んど目に見えないくらいな微かな龜裂が、家の前方の屋根根から稻妻型のひゞを入らせて、壁の面を這ひ降りながら、陰鬱な古沼の水の中へ消え失せて居るのに氣が付くのだが。

今回はもつと澤山書くつもりで居たが、執筆の途中で風邪にかゝつたので、已むを得ずこんな短い物を載せることにな

つた。次號には大いに奮發して澤山載せることにしよう。

( T J 生 )

## 6. 書 簡

「社会及国家」大正七年七月号（五七号）「社報及通信」欄

大正七年六月二六日付けと推定される。大村正夫は前出。《慶事》とは出産の事で、六月二三日男児誕生、匡一郎と名付けられた。《笹沼》は笹沼源之助、《長尾》は長尾優で、共に一匡社社員。

○谷崎潤一郎氏より通信（原稿に添へて）

電報ならびに御手紙拜見、今日此れだけ出来ましたから兎に角おくります。來月一日頃まで待つて下されば、もつとかいてもよろし。

これは創作にはあらず、されど探偵並びに怪談小説の大家なるアメリカのポオの翻譯故先の方へ行けば大いに面白きつもりなり。且純文藝物としても立派な價



値あるものに候、全部譯した上で單行本にして出版するつもりです、今度は急いだので譯し方甚だ不満足ながら次號よりは完全なものを出すべし。二十六日夜地震の時刻

大村正夫様

谷 崎 拜

御慶事はまだにや伺上候笹沼長尾兩氏へよろしく。

### 7. 『朝鮮雜觀』

これまで初出が不明であつたが、「社会及国家」の大正八年一月号（六三号）である事が判明した。全集本文と初出との異同は少ないので翻刻はしないが、初出末尾には、（大正八年正月七日記）と執筆時が明記されている。

### 8. テオファイル・ゴーチエ原作谷崎潤一郎

芥川龍之介共訳『クラリモンド』

「社会及国家」大正八年十、十一、九年一月号（七

一、七二、七三号）

本文は長いので省略する。

様々な特徴から判断して、久米正雄訳短編集『クレオパトラの一夜』（大三・十刊）に収録された同作品の芥川によるラフカディオ・ハーンの英訳“Clarimonde”からの重訳をたたき台にして、恐らくは谷崎が単独で、フランス語版“La Morte Amoureuse”とハーンの英訳をも時に参照しつつ、若干の加筆を行ったものがこれであると推定出来る。

まず第一に、芥川の訳文が下敷きになっている事は、本文と芥川の訳文とを比べてみただけでも明らかであるが、決定的な証拠としては、誤植の一致する例のある事が挙げられる。十二巻本の岩波の新版芥川全集で示すと、第一巻七四ページ九行目にある《婚約をした悪人》は《恋人 (affianced lover/fancee)》(以下 (ハアン訳) フランス語原文) の形で示す) の、同七九ページ十三行目にある《ヒーの牧師補》は《Cー(CーC\*\*\*)》の、同八二ページ十一行目にある《わしの馬》は《騾馬 (my own mule)/la mienne (mule)》の

同九三ページ十四行目にある《ベルサガル》は《ベルサザル (Belshazzar/Balthazar)》の、同百一ページ九行目にある《アルゲリトーン》は《マルゲリトーン (Margheritone/Marheritone)》の誤植であるが、これらはすべて芥川訳にも共訳にもある。これは谷崎が、英訳やフランス語原文に当たって見ずに、芥川の訳をそのまま使った箇所がある事の動かぬ証拠である。

しかし、それならば谷崎は、全く芥川の訳文しか見なかったのかと言うと、それはそうではなくて、第一回掲載分の最初の六ページと第三回掲載分の九七ページから最後までの一八ページについては、ハアン訳とフランス語原文を参照した形跡がある。例えば、ハアンの訳がダッシュを多用するのに対して、ゴオティエはダッシュを全く使っていないのだが、共訳の最初の四ページまでは、ダッシュを使っている。そしてそれ以後はハアンとほぼ一致する使い方をしている。また共訳の四ページにある《私はそれらのことを茲に書き記したくはない。》に対応する文章は、フランス

語原文にしかない。また第三回掲載分の九七ページ以降では、芥川の訳文の脱漏や誤訳を訂正した例があるし、百二ページにあるクラリモンドの唇の隅に付いた血の滴の形容は、芥川が《露の滴つたやうに》、ハアンの“like a speck of dew”であるのに対し、ゴオティエは“comme une rose”。共訳は《薔薇の様に》で、フランス語原文を参照した事が分かる。つまり、共訳は、冒頭と末尾の数ページでは、確かに原文に当たっているのである。しかし、共訳は、その中間部分では、《わし》を《私》、《うちや》を《うだ》、《そして》を《さうして》と改める等、ほんの僅かな修正しか施していない。そして、芥川の訳文にあった脱漏や誤訳も直していない場合が殆どである。従って、谷崎は冒頭と末尾を除く大部分では、英訳すら殆ど参照しなかった事が分かるのである。

この共訳は、かようにお粗末なもので、誤訳や脱漏も少なくない。しかし、所謂ファミ・ファータール、吸血鬼女、死んだ女性などに自らも深い関心を抱いていた谷崎は、この作品に対して興味を抱いたからこそ翻

訳を試みたに違いないのである。恐らく谷崎は、最初フランス語の勉強を兼ねるつもりで始めて見た所、語学力の不足から予想以上に手間取った為、時間にも追われ、嫌気もさして、いい加減に片付けたのであろう。「社会及国家」が仲間内の雑誌であったからこそ、この様な我がままも通ったのである。

なお、没後版谷崎全集月報27の第23巻後記には、『クラリモンド』は芥川との共訳なので収録しなかった旨が記されている。

## 9. 『むかしばなし』

「社会及国家」昭和七年十一月号(第二百号記念号)久し振りに寄稿した経緯は、本文中にある通りであろう。文中の《岸巖》《笹沼(源之助)》《額田(晋)》《大村(正夫)》《遠藤始郎》は、いずれも一匡社社員である。《山田濶》は《山田湿》の誤植で、『瘋癲老人日記』には実名で登場している。《小林良吉》は、君島一郎の『朶寮一番室』によれば、山形県最上郡古口

村出身なので、同村出身者を主人公とする谷崎の『彷徨』執筆に、恐らく協力していると思われる。また、津島寿一の『谷崎潤一郎君のこと』によれば、谷崎は津島に、『羹』の橘宗一のモデルは小林良吉だと語ったという事である。

《小野法順》が《早川雪洲プロダクション》の創立に関係していた事については、田中純一郎の『日本映画発達史』第七章第三四節に記述があり、それによれば小野は、昭和五年、早川雪洲の友人の意を受けて阪急の小林一三らに図り、宝塚映画株式会社を設立すると共に、自らその重役と東亜キネマの重役を兼ねたと言う。谷崎が階段から転げ落ちた話は、『当世鹿もどき』の「質屋通ひ」にも出ている。

## むかしばなし

谷崎潤一郎

きのふ久しふりで東京へ出て来て偕楽園へ泊まったところが、今度一匡社から記念號を出すについて何か

私にも寄稿しろといふ註文である。成る程、私は一匡社の社員ではないけれども、しかし一匡社創立委員の一人である岸巖とは當時非常に親密にしてゐたので、一匡社といふものが成り立つに至つたいきさつだけはよく知つてゐる。ゆうべも笹沼と枕をならべながら寝物語にあの時分のことをいろ／＼話し合つて老人めいた感慨に耽つたことであつたが、なんでも一匡社の計劃を最初に提案した者は額田君か大村君で、それへ岸なぞが馳せ参じたのであつたとおもふ。兎に角「一匡社」といふ名前をつけたのは岸であつたことは確かである。その時分、岸はまだ大學生で、前の細君と向嶋の寺嶋あたりに所帯を持つてゐたが、遠藤始郎、山田温、小野法順、それに私などゝいふ連中がごろ／＼ころげ込んでゐて、全く梁山伯のやうな有様であつたから、われ／＼はその家を「山寨」と稱へてゐたものだった。つまり、此の岸の山寨時代が一匡社の創立時代であり、私の放浪時代であつて、多分大正一二年頃だつたであらう。山寨同人の一人である遠藤始郎は今も尙一匡社員であるから諸君も御承知のことと思ふが、

山田温といふ男は、岡山縣人で、道樂者で、中々の美音家で、小唄の節廻しなど上手なものであつた。そして政治科を出てから大阪市役所の役人になり、後に肺病か何かで陋巷に窮死したさうであるが、その時分の消息は誰にもよく分つてゐないらしい。小野法順はもと淨土宗の僧侶で知恩院内局の外交部長といふやうな要職を占め、華頂山塔頭の住職であつたが、長田幹彦が「尼僧」といふ小説のモデルに使つたゝめに山を逐はれて東京へ逃げて来て、一時は相場師になるのだと云つて穀麴町あたりへ出沒した揚句の果てに、私との縁故を辿つて山寨へころげ込んだのである。彼は後に後藤新平伯の秘書となり、後藤伯死後は早川雪洲プロダクションの創立に關係してゐたが、その頃一度岡本の拙宅へ訪ねて来たきり、近頃は又杳として音沙汰がない。

今思ひ出しても可笑しいのは、山寨時代の一二年前に、岸と私と二人で岸の故郷青森縣鱒ヶ澤地方へ旅行した時のことである。此の旅行の目的といふのは、岸のお父さんの友人で青森縣政界の有力者である某氏が

ら金を借りて、一部を雑誌「新思潮」の経営費に充て、一部を岸の用途に充てようといふのであつたが、さて出發といふ時になつて汽車賃の工面が出来ないのである。そこでよんどころなく、私が借樂園夫人から貰つた一張羅の晴着を質入れしようといふことになつた。その衣類といふのが、大島の羽織、好貴織の袷と下着、角帯、長襦袢等で、何しろ私が絹物を着るやうになつた最初の一と揃ひなのである。私は此奴を取られてしまふと、晴着にも不斷着にも外に着るものがないのであつたが、旅行中はそんなぞべらくしたものでありも制服を着て行けばいいといふのである。その制服も私は持つてゐないので、それも亦誰かのを借りるといふことになつた。で、たしか小林良吉の泊まつてゐた下宿屋の一室だつたと思ふが、岸、小林、遠藤などと一緒に、私は數時間後には質屋の藏へ收まるべきそのりゆうとした衣類を着て、酒を飲みながら今云つたやうな相談をしてゐる最中に、ふと便所へ行きたくなつたので、とん、とん、とんと、二階を駆け下りたものだつた。それが酔つてゐた上に、着馴れない丈の長

い着物をぞろりと着流して、懐ろ手をしたまゝ、突っかけ草履か何かで、小意氣に梯子段を下りようとしたから溜まらない。忽ち私は裾を引つかけて、段の中途から轉げ落ちて、イヤといふ程眼のふちを裂いた。と、眞つ先に岸が駆けつけて來たのはいいが、傷口から血がたらたらと着物の上へ滴れるのを見て、傷口の方を拭かないで、一生懸命に着物の方を拭くのである。「傷は構はないが、質の値が下つちやあ大變だからね」と、さういひながら滴れる傍から着物ばかりを拭くのである。

此の話は當時笹沼には内證にしておいたまゝついでしてゐたのであつたが、ゆうべ始めて披露をして、借樂園の家族一同大笑ひをしたことであつた。(昭和七年十月記)

次に「社会及国家」以外の場所に掲載されたものを紹介する。

## 1. 『手紙』

「歌と歌」創刊号「鴫田英太郎供養」（昭和五年五月）

この書簡は年度の記載を欠いているが、恐らく昭和三年のもので、『新聞の夕刊』は、「大阪毎日新聞」と「東京日日新聞」の夕刊に丁度この日（昭和三年十二月四日）から連載が始まった『蓼喰ふ虫』を指すものと思われる。

この書簡の中に出て来る『僕をたよりにするな』という言葉は、谷崎が鴫田英太郎に繰り返し言っていたもので、その事は、谷崎が昭和四年五月、鴫田の著書『現代生活考』（昭和四年十月刊）に寄せた「序詞」に詳しい。

## 手紙

過日は手紙をありがたう

東京から若い人が来る度に君の噂はよく出るのです

が氣にかゝりながらいつもの筆不精にて御無沙汰してゐてすみません

君が酒を飲み過ぎて體をこわしたと云ふ話を誰かからきいてみました 何卒體を氣をつけてくれたまへいくら丈夫でもあまり亂暴するとやられる 僕も此の頃努めて酒を節してゐます

僕をたよりにするなと云ふことをいつまでも忘れずに守つてゐてくれるのはまことにうれしい いろいろ苦しいこともあるでせうがそこは持ち前の勇氣を以つて打ち克つてくれたまへ その力が君にあると思へばこそ 僕もあゝ云へたのだから

それにしてもずゑぶん久しく會はないが一度ほんたうに會ひたいものだ

上方にやつて来る機會はありませんか 田中總一郎氏とはよく會ふのだが

此の頃新聞の夕刊を書き出したので 誠に忙がしい今急に君のことを思ひ出したのでねむい眼をこすりながらこれを書きました

御目にかゝつた事はないが何卒奥様にもよろしく

ではいづれ又

十二月四日午前二時

谷崎潤一郎

鴉田君

侍史

## 2. 『はしがき』

門脇陽一郎著『お坊ちゃん』（昭和四年一月 万里閣書房）に掲載されたもので、松本克平氏が『私の古本大学』の中で言及されている。

はしがき

僕は此の本の作者とはずぶん古い知り合ひである。上山草人がまだ東京の新橋にゐた頃あすこへしきりに出入りをしたのが交友の始まりであるから、たしか大正六七年の時分かと思ふ。その後君が村田榮子嬢と夫婦別れをしたと云ふ噂を風の便りに聞いただけで

久しい間會はなかつたが、つい先達十年振りでひよつこりやつて來た。そして僕の顔を見るなり「たいへん歳を取りましたなあ」と云つた。が、正直のところ、僕も君を見て矢張り同様な感に打たれた。僕は君の一種不敵な精悍な意氣を買つてゐたのだが、今でも何處か昔の佛はありながら、さすがに苦勞人じみた落ち着きが出來てゐるのは、歳は争はれないものだと思つた。

聞けば此の數年來諸口十九君と一緒に仕事をし、同君のために多くの喜劇を書き卸したと云ふ。そしてこれらの作品は、諸口君の舞臺上の手腕と相俟つて大いに人氣を呼んでゐると云ふ。そんな話をする時の君は依然として當年の意氣盛んなる君であるのが嬉しかつた。僕は諸口君の芝居が當つてゐるやうに此の脚本集の賣れ行きの好況であることを祈つて已まない。

昭和三年十二月

谷崎潤一郎

## 3. 『選者の一人として』

「婦人公論」昭和五年一月号

「婦人公論」では、昭和四年七月号で、谷崎潤一郎など十人を選者とする美人コンテストを企画し、広く読者に美人の写真を募集した。後出『審査員の言葉』からも分かるように、写真のみによる選考であった。

この文章は、一位当選者についての七人の選者の選後評の内の一つとして掲載されたものである。他の選者、即ち菊池寛・有島生馬・坪内士行・岡田道一・鶴見祐輔・石井漠（藤原義江・早川雪洲・片岡鉄兵は評を書かなかった）が、概ね古風な日本女性として賛辞か祝辞を呈している中で、ただ一人猛然と反対論を展開している所に、谷崎の個性が歴然と現れている。一般に、谷崎はこの時期、日本回帰しつつあったとされているが、この文章を見ても明らかな様に、谷崎の趣味は、決して所謂純日本趣味ではない（もっとも何を以て日本趣味とするかは甚だ曖昧であるが）。昭和四

年六月の「婦人公論」に掲載された奈良ふみ子の『谷崎潤一郎氏とベルンヤ猫』でも、「先生の女の好みは、日本趣味ですか、それともモダンですか」という問いに対して「どちらもない。一方に限ると、不便になるよ。」と答えている。所詮谷崎の趣味は、支那趣味とも西洋趣味とも日本趣味とも片付かない、谷崎趣味とでも呼ぶ他ないものなのであろう。

なお、本文は、宮内淳子氏の『「蓼喰ふ虫」の頃—「La Femme」の消失—』（『日本文学』昭和六十二年六月号）に一部引用されている。

## 選者の一人として

谷崎潤一郎

僕も選者の一人であるが、しかし僕の選んだ中には此の當選者の寫眞は這入つてゐなかつた筈だ。かう云ふタイプは甚だ僕の標準に合はない。積極的にイケナイ。その不服の點を云はして貰はう。

此の顔には近代的な生き生きとした所もなければ、昔風のおつとりとした所もない。東京風のキビキビし



た感じ、京阪美人の豊艶さ、その執方も缺けてゐる。就中最も問題なのは鼻だ。此の鼻は恐らく、中途でちよつと鼻梁骨が飛び出て、やゝ鷲鼻になつてゐるだらう。華族の令嬢などの鼻によくある型で、昔はかう云ふのが貴族的な上品な鼻のやうに思はれてゐたらしいが、西洋では猶太人の鼻である。兎に角、鼻の形の長いや中高なのは凡そ近代的の感じに最も遠い。鼻はむしろ短かく反對に中凹みに反つてゐるもの、即ち獅子ノ鼻の方が當世である。猫でも鼻の長いのは珍重されないが、人間の女でも同じことだ、その證據にはアメリカのキネマ・スタアの鼻を見るがいい。此の寫眞のやうな鼻を持つてゐる女優は一人もない。體格も鼻の感じと同じやうに骨張つてゐて魅力がない。

皮膚は、寫眞では分らないが、多分淺黒い人だと思ふ。かう云ふ顔で色の白い人はめつたにない。但し黒いと云ふことは必ずしも缺點ではないが。

以上の理由で、僕は不賛成である。僕の想像に間違つたところがあつたら詫まる。しかし一人ぐらゐ不賛

成があつてもいいだらうと思つて、遠慮のないところを云ふことにした。

#### 4. 『倚松庵詠草』

「スバル」昭和七年三月号

『谷崎潤一郎家集』に収録されているものもあるが、若干の異同がある。また『朝な夕なひゞく六時の鐘のおとに添へてすゞしき楨の下風 於高野山』一首は、『南紀芸術』昭和八年十月号『扉』にも掲載されている。

詞書の中にある『西南院』は高野山にある別院。『鈴木ベアトリス女史』は鈴木大拙夫人で、昭和六年七月初めから九月初めまで『西南院』に滞在していた事は、谷崎丁未子の『高野山の生活』（改造）昭六・十二）にも出ている。

なお、これらの歌と詞書の多くは、吉井勇の「相聞居隨筆」中「谷崎君の歌」（昭和十七年五月甲鳥書林刊『相聞居隨筆』所収）の中に引用されている。

倚松庵詠草

谷崎潤一郎

昭和五年九月、前妻と別れて北陸にあそぶ

ただひとり今日ぞ越路の足羽川明日をさだめぬ旅のそ  
ら哉

十月下旬吉野にあり

みよしのの吉野の川の川上に妹背の山はありと知らす  
な

上市は秋の日晴れて軒並の障子の紙の眞白なる町

昭和六年夏新妻と共に高野山にあり、新妻雷を恐るるこ  
と甚し

南無大師遍照金剛おそろしや高野のやまの夜のいかづ  
ち

西南院にて鈴木ベアトリス女史に揮毫を求められければ

朝な夕なひびく六時の鐘のおとにそへてすすしき楨の  
下風

本年二月五日攝津の國魚崎に居を下す、隣家は友人根津  
氏の新邸なり、二階の窓より住み馴れし岡本の山影も見  
え、西に住吉川の堤の松を望む、思へばわれ關西に移り  
てより早や十年にもなりぬ、そのあひだ家を變ふること  
五六たびを下らず、去年の夏よりは紀州に、河内に、西  
宮市外に、定まれる宿もなくて或は寺の宿坊を借り、或  
は友人の別業を頼りて隨所に暫くの生計を營む、かくて  
もなほ山青く水清き攝陽の地を捨てかねてふたび此處  
に假りの庵を結びたるに、なんとはなしにふるさとに歸  
りつる如き心地すること實に我ながらあやしき限りなり

うつり來てととせになりぬ灘波津の何にひかるるわれ  
にかあるらん

つのかにの住吉川のきしに生ふる松の木かげをたのみ  
てぞすむ

さだめなき身はすみよしの川の邊に變らぬまつのいろ  
をたのまん

我が庵はすみよし川の岸邊なるつつみの松のつゆしげ  
きもと

住みわびし身にしあれども住よしのまつの木かげは住  
みよかりけり

### 5. 『新聞小説を書いた経験』

「大阪朝日新聞」昭和八年二月九日・十日・十一日

この中で谷崎は、△「大人の讀む文學」について述  
べているが、同時期の『芸談』(改造)昭八・三(四)  
や『直木君の歴史小説について』(「文芸春秋」昭八・  
十一(九・一))でも同様の発言をしている事は注目に  
値する。それらの文章に徴してみると、「大人の讀む

文學」には二つの側面があるようである。即ち、自然  
主義以来の青臭い文學青年趣味の、狭い文壇内文學で  
はない、面白い国民的文学という意味と、《俗世間  
の労苦を忘れさせ》△「心の故郷を見出す文學」(『芸  
談』)という二つの側面である。これらは、共に谷崎文  
学の一貫した特徴ではあるが、関西移住後、特に「老  
い」や「疲勞」を感じ始めていた谷崎の文學に、後者の  
色彩が強まって行つた事には、注意すべきであろう。

### 新聞小説を書いた経験

谷崎潤一郎

新聞小説を書くといふことは、私のやうな運筆家に  
はなか／＼の仕事である。一回の分量が四百字詰の原  
稿用紙で四枚乃至五枚であるから一、二時間もあれば  
書けさうなものだが、それが私には容易でない。普通  
私はまる一日を費して、隨筆ならば七、八枚書けるこ  
ともあるが、創作ならば先づ四枚である、最後の十枚  
十五枚ぐらゐになると、一氣に徹夜して書き上げる場

合もないではないが、最初の進行は日に一、二枚、最も油が乗つて来て六枚七枚、だがそんなことはめつたになく、殊に近年は書齋の採光、温度、その他紙筆硯等の文房具や身邊の器物の吟味がやかましく、一層運筆になりつゝあるので、平均四枚といふところが精一杯である。起きるとから寝るまで、一切の訪客を絶ち、ちよつとの外出もせず、終日机に向つてゐてたつた四枚しか書けないのだから、人は不思議に思ふだらうが——いや、自分でも呆れてゐるのだが、全く事實なのである。おまけに私は、隨筆にせよ創作にせよ、或る仕事にかゝつてゐると、その間は外の事に頭が少しも働かない。二三枚の感想文でも手紙一本でも書く氣になれず、強ひて書かされれば再び頭を前の仕事に振り向けるまでに一日ぐらゐ暇がかゝる。で、新聞小説は短くても三月や四月は連載されるものであるから、その三月なり四月なりの間、私は全然書齋に籠居して、朝から晩までそれに没頭しなければならぬ、といふことになる。昔は朝刊の續き物でも週に一回は休みがあつたから、それでもほつと息をつく暇はあつ

たのだが、近ごろのやうに一日も休まないのでは、書き出したが最後、二、三時間客に居据わられても忽ち大支障を生ずる始末で、おち／＼酒を飲むことも出来ない。それも仕事のためだからまあ辛抱するとして、何より困るのは書き直しが出来ないことである。雑誌の場合だと、大概は全部脱稿してから掲載されるので、讀み返したり書き直したりする暇があるが、新聞はそんな譯に行かない。初めに餘裕を作つておいても直きにギリ／＼まで追ひ着かれて、書いた傍から一回一回持つて行かれて、それがその日その日の紙上へ現はれる。だから書き直す暇がない。みす／＼拙いなと思ひながら渡してしまふ。それが、その一回だけの不出來で濟めばいゝけれども、筆の勢ひで事件の發展が變な工合に外れた時など、もう絶対に取り返しがつかない。その一回の氣紛れが原で筋が思はぬ方向へこぢれて行き、書けば書く程最初のプランとは似ても似つかぬ成り行きを辿る。どうせもうこれは失敗の作だと知りながら、作者自身「困つた困つた」と思ひながら、責め塞ぎにいやいや筆を執る、——さうなると、

仕事に何の楽しみもないから、いよいよ速力が鈍くなる。小説家稼業もつくづく辛いと思ふのはさういふ時である。(つづく)

### 新聞小説を書いた経験(二)

谷崎潤一郎

速く書けば書けるけれども、入念に仕事をするので遅くなる、といふやうな人でもないではないが、概して遅筆家といふものは、巧くも拙くも速くは書けない人なのである。遅筆家には遅筆家特有の持ち味があるが、速筆家にも遅筆家に真似られない味がある。だから遅筆の故に凝り性だとか、特別の苦心を拂ふとかいふ證據にはならないし、従つて遅筆を見えや自慢にする理由はない。紅葉山人は有名な遅筆家で、「金色夜叉」を連載してゐるころしばしば「新聞を休むので讀賣や二六は困つたといふが、露伴、鏡花等の諸家は相當に速いやうである。漱石も、午前中に新聞の一回分を書いたといふから遅い方ではない。われらの友人仲間

では、志賀君、久保田君が遅く、武者小路、里見、佐藤の三君が速い。志賀君の文章は非常にコクがあつて、遅筆家でなければ書けない長所があるが、私は武者小路君の、頭に浮かぶことをどんどん筆にして行くといつた風な、飾り氣のない、素朴な、性急な書き方にも妙味を感じる。「口で話す通りに書く」といふ佐藤の文章など、志賀君のを遅筆家の名文とすれば、あれは速筆家の名文だ。コクはない代りに、やりつ放しで、出たところ勝負で、淡々たる飄逸味がある。ドストイエフスキイは金がほしさに大急ぎで書いたので、同じ形容詞が一ページの間に幾つも使つてあるといふが「カラマゾフ兄弟」や「罪と罰」がそんな風にして書かれたとすれば驚嘆に値する。私は又、直木君、大佛君、白井君等、現代の大衆作家諸君の筆の速いのにも驚いてゐる。「通俗物ならば」とか、「程度を下げて書けば」とかいふけれども、私なんぞには、通俗物なら通俗物のやうに手間がかゝるので、そのために速く書けるといふ譯には行かない。もしも私があの人達と同じ速さで物を書くとしたら、支離滅裂、拙悪見るに堪へざる

ものが出来るであらう。考へて見るとあの人達は、私  
 がまる一日かゝる仕事を三つも四つも同時に引き受け  
 て、一年中打つ通しにそれを續けて、しかも相當に面  
 白く讀ませてゐる。私のやうな遅筆家には、あゝいふ  
 ことは殆ど生理的に不可能である。

### 新聞小説を書いた経験(三)

谷崎潤一郎

さういふ私であるからして、元來新聞小説を引き受  
 けることが無理なのだが、そのくせ頼まれればいつもウ  
 ツカリ承知をして、書き出してから後悔するといふや  
 うなハメになる。それといふのが、私は新聞へ書くこと  
 が好きだったからである。今日では大分事情が違つて  
 來たので、あながちさうは思はないが、一體に、雑誌  
 の創作欄の讀者は主に文學青年であるのに反し、新聞  
 は讀者層が廣いから、どういふ所に隠れた理解者があ  
 りないとも限らない。一方は狭い文壇のニキビ青年ども  
 が相手、一方はコセ／＼した文學理論などに捉はれな

い、活社會の知識階級が相手である。漱石氏なども文  
 壇では敬遠されながら、新聞によつてあの大きを成し  
 た。あゝいふ例があるものだから、新聞の方が「大人  
 の讀む文學」を書くのに適するやうな氣がしたのであ  
 る。それともう一つ、新進作家時代には、三百枚、四  
 百枚といふ長篇は、なか／＼雑誌へは載せてくれない。  
 で、野心的な大作をする場合には、新聞の舞台を借り  
 るより道がない。それやこれやで引き受けるので、だ  
 から最初は非常な意氣込みで書き出すのだが、多くは  
 遅筆のために長い間の辛抱が續かず、途中で投げ出し  
 てしまふのである。勿論三百枚四百枚のものを最後ま  
 で書き上げて、十分に推敲して、然る後新聞社へ渡す  
 のが理想的であるが、それは時間と金に餘裕がなければ  
 出来ないことで、今日新聞小説をそんな風にして書  
 いてゐる作者は一人もない。尤も豫じめ大體の筋だけ  
 は組み立てゝあるので、どんなものが出来るか大凡  
 その見當ははくはずだけれども、これとても決してア  
 テにならない。前にもいふ通り、小説中の事件の發展は  
 實世間の事件と同じく、原稿へ書き現はした時に始め

て決定するのであつて、登場人物の風貌性格等も、筆を下すまでは作者にもどんな人間が出来るかはつきり分つてゐないのである。従つて、回を追うて發展する物語の筋は、物語自身の勢ひで自然に一つの方向をたどるので、作者の力を以てしてもその進行を遮ることが出来ず、却つて作者がそれに引き摺られて行くやうになる。それで、事件が作者の思ふ壺へ箱まつてくれると、とんとん拍子に筆が運んで行くけれども、不幸にして作者の意圖に外れた方へ伸びて行かれると、もう投げてしまふより仕方がない。餘人は知らず、私の経験ではさうなので、つまり新聞小説ばかりは一種の水物だといふことになる。たまたま當つた時にはいいが、當らなかつたら、新聞社にも讀者にも迷惑をかけ、作者自身も思ひも寄らぬ不面目を招く。私の過去の成績を振り返ると、「羹」「白晝鬼語」「蓼喰ふ蟲」等大毎東日へ書いたものは割合に成功してゐるが、どういふものか朝日へ載せた小説はことごとく失敗してゐる。「痴人の愛」だけは通俗物として好評であつたが、あれも中途から雑誌へ載せたから兎も角もあれだけに纏

まつたので、新聞紙上へ續けてゐたら尻切れとんぼになつたかも知れない。その他は、古くは「鬼の面」、それから「肉塊」、「黑白」、「亂菊物語」等、随分御厄介になつてゐる譯だが一つもロクな作品はなく、何とも彼ともだらしのないものばかりである。まことに朝日新聞社にはお氣の毒で、濟まないと思つてゐるのだが、そしていつか機會があつたら、一つは名譽回復かたゞ不義理の補ひをしたいのだが、これも水物である以上、さういふ廻り合せになつてしまつたので、作者の罪ではないのである。

私は、時間の餘裕さへあつたら、今でも新聞小説を書いてみたい氣は大いにある。時代物、現代物、執方も書いてみたいと思ふ。たゞ問題はその「時間」である。「蓼喰ふ蟲」を書いた時は政治季節で報道記事が多かつたせゐるか、幾日でも休み放題休ませてくれてゆつくり筆を執ることが出来、おまけに小出君が立派な挿繪を書いてくれたので、あんなに愉快に仕事をしたことはなかつたが、ああいふ條件はさうさう望めないとする、今後は少くも三分の二以上脱稿してからで

なければ、新聞へ書き出すことは危険である。しかし一方からいふと、書くものが日に日に活字になればこそ書くのに張り合ひがあるけれども、半年も一年も書き溜めてゐると、そのうちに腐つて来るやうな心配もあるので、結局新聞小説は遅筆家には無理な仕事だといふ結論に復へるのである。

ついでながらいふ、人は滑稽に思ふであらうが、隨筆といふにも當らないこの簡単な原稿ですら、私はこれを書くために完全に一日潰してゐるのである。(終)

## 6. 『わるぐち懺悔』(談話)

「大阪毎日新聞」「東京日日新聞」昭和十年二月二日 前日七六歳で死去した初代中村鴈治郎についての談話である。〈悪口を書いた時に死なれてはどうも寝醒めが悪い〉という所に、死を恐れ、死者の恨みを恐れていた谷崎の神経が現れている。

『谷崎潤一郎文庫』『月報11』の「特集座談会」によると、この文章は、当時「大阪毎日新聞」学芸部に

た山口廣一氏が、鴈治郎が入院してまだ生きていた間に、夙川のマンション、パインクレストにあった谷崎の仕事場で談話を取り、文章化し、後で谷崎にゲラを見て貰ってOKを取って掲載したものである。

「大阪毎日新聞」「東京日日新聞」両紙の本文を比較してみると、「東京日日新聞」の方には、「……鴈治郎の思ひ出……」という副題が付されており、ルビ等にも小異があるが、翻刻は、右のような事由に鑑み、「大阪毎日新聞」の本文によった。

## わるぐち懺悔

### 谷崎潤一郎【談】

私は鴈治郎の舞台をさう澤山見ない。東京にゐたころならそれでも上京中の鴈治郎を時々は見にも出掛けたが、大阪へ移つてからも十幾年、その間殆ど見ないといつてもいい。二三年前歌舞伎座で見た「土屋主税」あたりがわづかに記憶にあるぐらゐだから、いま鴈治郎についての談話を求められても語るべき何



の材料も持ち合せてゐないといふのが本當だ。

だが、たゞこれを機會に一言いつておきたいのは今年の「改造」の新年號に載せた拙稿「大阪の藝人」中に鷹治郎に筆が走つて、大阪のものなら大抵好きになれる私も鷹治郎だけはどうしても好きになれないといつた意味のことを書いたことの弁明だ。これは別に意地の悪いといふほどの悪口でないといふ自分では思つてゐるのだが、時たま／＼鷹治郎の危篤が傳へられてゐた際なので、こんな悪口を書いた時に死なれてはどうも寢醒めが悪いようで、實は内心あまり氣持よくなかつた。本人は恐らく讀んでゐなからうが、もし家族の人達でも讀んだならこんな大病人をつかまへて……と、きつと氣持を悪くすることだらうと思つたからだ。

私が改造社から頼まれて「大阪の藝人」を書いたときは東京へ旅行中で、鷹治郎の病氣は全然知らなかつた。危篤だといふようなことを少しでも知つてゐたら、あんな悪口めいたことは決して書かなかつただが残念なことをしたと大阪へ歸つてから氣になつてゐた。それが今、その訃に接した。亡き鷹治郎さんの靈

にもまた遺族の方々にも、この際以上のような私の氣持だけは是非聞いておいてもらひたい氣持で一杯だ。

私は左團次とか六代目とか東京の役者なら個人的にも交遊關係を持つてゐるのでよく知つてゐるが鷹治郎となると舞台さへ大して見ないほどだから、個人的には何ら知るよしもない。従つて鷹治郎の人間としての面白さなど全然知らずにすんだが、とにかく舞台の上では大阪の役者らしい特色と藝の巧拙を離れた何といふか一種の「大きさ」を持つてゐた人だとは思ふ。先日中座の初春興行を見たが延若、梅玉、魁車、壽三郎と重立つた大阪役者が全部顔を揃へてゐても、鷹治郎があるのとゐないとはすべてが違ふ。鷹治郎を失つた大阪芝居の淋しさを十分味はされた。確かに淋しい、もの足りない感じである。昔みた「河庄」の治兵衛なども、總體に藝がうるさく細かすぎて感心出来なかつたがあの最初の花道の出だけは顔、姿の類のない美しさが今さらながら絶品として思ひ出される。

元來、私は東京の芝居を見なれたせるか、芝居だけは東京でないと駄目だといふ好みがある。

一體上方芝居は「間」を持たずことをせず、すべてに動きが多い。どこまでもあくどくて毒々しい。これに比べると東京の芝居は静かで動きの少い腹藝式でいい。だが、この相違は結局東西兩都の見物人の觀劇心理の相違で、大阪人の好みが大坂の芝居をあゝさせてしまつたのだらう。従つてそれを代表する鴈治郎のあの藝風もやはりこの大阪人の好みが自らこれを生んだのではなからうか。

しかし、一步退いて考へてみると東京の芝居は團十郎の活歴を考へ合せてみても現在ではかなりモダン味が多分に加味されてゐて歌舞伎劇本來の味よりも新歌舞伎劇といった風のものに近づいて來てゐるようである。と考へて來ると、あるひはあの花やかだが仰々しいと思はれた上方藝を代表する鴈治郎のほうが却つて本當の昔ながらの歌舞伎を傳へた尊いものでなかつたかと思ひ合はされる。

## 7. 渋沢秀雄宛書簡三通

渋沢秀雄著『手紙隨筆』（昭和三十一年十一月 文芸春

秋新社）所収

（イ）同書によれば年代は不明だが、住所が兵庫縣武庫郡精道村打出になつてゐる事から昭和九年三月以降十一年十一月以前のものと分かる。文中の《小糸君》は小糸源太郎であらう。歌は旧作で、前掲『倚松庵詠草』の中にある。

### 拜復

過日は御手紙御なつかしく拜見致しました 往年小糸君と同道飛鳥山へ御訪ねしたことも 愛蓮堂のことも今以てよく記憶いたして居ります 眞つ暗な廊下を通つて廣い御座敷へ參つたら 立派な庭園の向うに工場の煙突の聳えてゐるのが甚風致を害してゐるのを残念に思つたことも覺えて居り升 其後繪の方を御精進の由 御風流御羨敷存ます とところで例の合戦（渋沢註 花合せのこと）の方へ如何、今でも時々御手合せをなさいますか 私はとんと田舎者に相成 誰方様にも御無沙汰致居、たまに上京いたしましたも 用がすめばすぐココッと歸つて參りますが 性來の孤獨好

き故 さう人に會ひたいとも思ひません もう近頃で  
ハほんたうの大坂ッ兒になりきつたつもりで居ります

うつり來てとゞせに

なりぬ難波津の

何にひかるゝわれ

にかあるらん

先ハ乍延引御挨拶まで 匂々

潤一郎

澁澤秀雄様

侍曹

(ロ)『手紙隨筆』によれば、封筒に昭和十一年十二  
月九日のスタンプがあり、住所は兵庫県武庫郡住吉村  
反高林になっている。

拜啓

御寒さの折柄御壯健にて大慶に存じます いつも御  
作物御寄贈になりながら つい筆無精にて失禮のみ致  
して居りますが 今度の御高著熱帯の旅は非常に面白

く拜見しました 此の書は單なる旅行記でなく、貴下  
の日常の御生活や趣味一端が窺はれるところも面白  
く、又旅行された地方が 從來あまり紹介されてゐな  
かつた方面であるだけ興味も深く、就中猛獸狩の話は  
甚だ珍奇に存じました、それに挿入の寫眞の出來榮え  
も非常に光彩を添へてをります、かう云ふ本は 矢張  
あなたのやうな教養と境遇の人でなければ、普通の文  
人にハ書けさうありません

末筆ながら あなたのおツムリの状態が其後大變化  
を遂げてをられるらしいことを 御著述に依て承知い  
たしました、小生の方は鬢髮霜を加へましたが 幸に  
まだ昔日の倂をとゞめてをります 呵々

十二月九日

谷崎潤一郎

澁澤秀雄様

侍史

(ハ)『手紙隨筆』によれば、これは、渋沢秀雄が自  
著『皇軍慰問』を贈った事に対して、谷崎が私家版

『細雪 上巻』に添えて送った礼状で、昭和十九年八月十一日付けのものと思われる。

拜啓

先般ハ御高著面白く拜見仕仕。小生ハ年久しき日劇のファンにて 澄川君（渋沢註 澄川久、歌手で、俳優で、腹話術の日本での元祖）ハ大好きな舞臺人の一人にて有これか之これか。従て腹話術もゴリラ等の寸劇も皆よく存じ居り なつかしく讀過どくか仕仕。拙著 細雪上巻一部御贈申上申上の間 御閑暇の折御覽ヒ下度下。但し時節柄あまり世間へばつとせぬやう致度 殊に文壇方面の披露ハ努めて差控へ居居。二付 所のおつもりにて あまり御吹聴ひいり下さらぬやう願上願上。乍末筆残暑の候第自愛ヒ下度下。

十一日

谷崎潤一郎

澁澤秀雄様

侍史

御高著中 峨眉山月半輪秋の詩ハ白樂天にあらず  
李太白に御座座。又あの詩の峨眉山は四川省かと存存。

右一寸注意申上申上。

## 8. 『三十分放談』（談話）

「創元」昭和十五年一月創刊号

「創元」は創元社のPR雑誌で、本文については、既に大屋幸世氏が、『PR紙誌探索（下）』（『日本古書通信』昭和六三年十二月号）で言及されている。

なお、ここで谷崎潤一郎が言及している『吉野葛』のラヂオ放送は、「東京朝日新聞」によると、昭和十四年十二月五日と六日の二回に分けて、夜九時から全国放送されたもので、脚色・依田義賢、演出・溝口健二、作曲・宮城道雄、配役は私・坂東蓑助、津村・深見泰三、物語・和田信賢、等々であった。

## 三十分放談

谷崎潤一郎談

どうも此の處ずつと忙しくつてね。源氏が濟むまで

は讀書も執筆も、まるで手につかない。仕事は大抵午前中にするやうにしてゐるが、さうとばかりもきまらない。

此の間は「吉野葛」の放送を聞いたが、まあよく出てゐたね。唄や音楽はよかつた。殊にあの中で、

麥搗ウんで

蓬搗ウんで……

の唄は放送局でも節が分らないので困つてゐたやうだが、どうするかと案じてゐたら、放送の時には歌詞も

麥搗ウいて

蓬搗ウいて……

と改めて中々よくはいつてゐたのでうれしかつた。放送局で調べてくれたら「麥搗いて」の方が正しかつたのだらう。その方が、その後にある「お手にお豆が九つ」と云ふ句と照應する。局も目に見えないところに、相當苦心のいるものだね。

しかし、僕はどうも自分の小説をラヂオや舞臺にかけることは、餘り好まない。好まないと云ふよりは、何か自分の舊惡をあばかれるやうで耻かしい。これ

迄、頼まれて止むなく上演を承諾しても、舞臺稽古の時、之も勧められて一二度觀にいぐらゐで、本舞臺をずつと落ち着いて見たことはめつたにない。それからラヂオと云ふものは、何しろ耳だけに訴へて來るものだから、どんなものでも何となく空々しい感じがして、いつそ、歌舞伎劇の放送のやうに、前に何度も舞臺を見て知つて居り、その俳優の癖や仕種などにも馴染があるものと、多少は自分の頭の中で補ひがつくから、まだましたが、さうでないものは實に空々しい感じがする。あゝ云ふ點は何とか改良する道がないものだらうか。

登場人物の言葉のアクセントが大いに氣になるものだね。まだ東京の言葉を使ふ時はそれ程でもないが、關西ことに大阪の言葉を使ふ段になると、それが實に目立つて、不快にさへ思ふことがある。アクセントの間違つた大阪辯ほど、間のぬけた聞きづらいものはない。

それから、近頃の若い俳優諸氏は、個有名詞の讀方をまちがへる。僕のを例にしても此の間の「吉野

葛」に出て来る「吉水院」をキッスキキンと讀んだ。比叡山の「横川」をヨコカハと讀んだ。又前進座の國太郎君が「二人の稚兒」を放送した時比叡山の「横川」をヨコカハと讀んだ。吉水院がヨシミツキンで、横川がヨカハであることは、中學校の國文や歴史で教はる筈だと思ふが。

吉水院と云へば、關西には櫻の名所も多いが、何と云つても醍醐の櫻が實によかつたね、しかし、あれも先年の水害で、もうあの美しさを見ることが出来なくなつたが、たつた一本だけで、しかも立派で美しかつたのは、道成寺の老櫻だつた。情景と時とがよかつたのにもよるが、實によかつた。やつぱり春がいいね。

## 9. 『審査員の言葉』

「婦人公論」昭和三三年三月号

「婦人公論」では昭和三二年十一月から、芥川比呂志・石原慎太郎・大宅壮一・谷崎潤一郎・成瀬巳喜男・丸尾長頭ら十一名を審査員として、ミス「婦人公

論」の募集を開始し、翌三三年六月十日午後一時より、東京大手町産経会館五階国際ホールで最終審査会を開き、二四名の候補の中から水着審査などを経て、ミス一名・準ミス二名を選んでいる。この日、石原慎太郎・成瀬巳喜男は都合があつて欠席したが、代わつて大江健三郎らが出席している。谷崎は、審査員を表して、ミスの頭上に銀の王冠をかぶせたという。

谷崎の『審査員の言葉』は、各審査員の言葉が昭和三二年十二月号から翌年四月号まで順次掲載されたうちの一つである。この中で谷崎が語っている前回の美人コンテストの際の谷崎の感想が、先に掲げた『選者の一人として』であることは言うまでもない。

なお、「婦人公論」昭和三三年八月号には、『ミス婦人公論最終審査経過報告』なる記事が掲載されているが、その中の黒木広美の『準ミス婦人公論に選ばれて』と題する感想の内に、《谷崎先生はねこのような顔が好きだつておっしゃつた》という一節のあることは、一応注意すべきであろう。

## 審査員の言葉

### 谷崎潤一郎

「婦人公論」が美人を募集することは今度が始めて  
なのではない。ずつと昔、今の社長の先代が社長をし  
てゐた時代にも一度試みたことがあり、その時も私は  
菊池寛君などと一緒に審査員を勤めた。しかしその頃  
のは最後まで寫眞に依つて判定するので、近頃のやう  
に親しく實物に面接して選出するのではなかつた。實  
は私は、かう云ふ風に天下の美女を數多く眼前に列べ  
させて、その優劣を見定めると云ふ役目を負はされた  
經驗がないので、先づ何よりも、そのこと自體に少か  
らぬ興味と興奮を禁じ得ない。新しい時代の新しい美  
人を定めることにも勿論大きな意義があるが、それよ  
り前に、私は美女群の前に立たされた時の私自身がど  
んな氣持になるかを知りたい。

※なお、今回入手・確認出来なかつたために、ここに  
翻刻することは出来なかつたが、谷崎の全集逸文と思

われるものを、次に掲げておく。

1. 小野賢一郎(俳号燕子)著『新聞記者の手帳』(美  
人大学社)の序文

〔帝国文学〕大正三年七月号「新刊批評」欄による。  
〔美人大学社〕は「青鞥」の荒木郁子が創めた出版社  
である。

2. 村松梢風の個人雑誌「希望」に大正四、五年頃、  
掲載された四、五頁の談話

〔村松梢風『現代作家伝』「谷崎潤一郎」による。〕

3. 『伊香保より』  
雑誌「草汁」大正七年六月号所載

〔読売新聞〕大正七年五月三十一日「各雑誌六月号要  
目」による。「草汁」は小野燕子(賢一郎)が創刊した  
雑誌だが、のち原石鼎に譲渡され、「鹿火屋」に吸収  
された。

4. 『新年二題』  
大正八年版『文章日記』(新潮社)所載

〔里見淳と渋沢秀雄の対談「大正時代」(銀座百点)昭  
和四九年一月号所載)の中に全文引用されている。

5. 第二次世界大戦中の雑誌「黄鉢」に掲載された日  
記

〔市居義彬『谷崎潤一郎の阪神時代』による。〕

また、近藤日出造『絵のない漫画』（昭和三年六月 鱒書房）所収の近藤と谷崎の対談「大谷崎笑談の巻」は、紙数等の都合で翻刻を見合せた。